

# フレッシュマンセミナーにおける ドラマ教育の導入（２）

## —Career Interview Skitの効果に関する追調査—

大木 俊 英<sup>1</sup>・鈴木 宏 枝<sup>1</sup>

キーワード：ドラマ教育、キャリア教育、コミュニケーション能力育成

### 1. 研究の背景

本研究の目的は、大木・鈴木（2018）で報告されている『Career Interview Skit』の効果を追調査することである。Career Interview Skit（以下CIS）とは、学生が所属専攻の教員達に現職に就くまでの経緯についてグループでインタビューし、それをスキット（劇）で再現するという活動である。これは東京都の海城中学高等学校で行われている教育活動に着想を得ており、その取組みの詳細はおおた（2017）の本で紹介されている（大木・鈴木, 2018でも述べているためここでは割愛する）。筆者らは「フレッシュマンセミナー」という大学新入生を対象とした半期15週の初年次科目で、2017年度にCISを試験的に実施し、その効果を探索的に調査した。

前述の研究において筆者らが掲げた研究課題は次の2点であった。1つ目は、「CISには学生の協働性や社会性を高める効果が期待できるか」である。CISはグループでインタビュー内容やスキットを考えるなど、学生が協働する場面が多い。そのような活動を通してコミュニケーション能力

---

<sup>1</sup>白鷗大学教育学部  
e-mail: toki@fc.hakuoh.ac.jp

の向上が期待できるのではと考え、この研究課題を設けた。2つ目は、「CISを通して学生は今後のキャリア（人生）について考えることができるか」である。教育学部で学んでいると教師という限られた職業にのみ目が向きがちだが、筆者らが教えている英語教育専攻では、一般企業勤務、公務員など教職以外の職業に就く者のほうが多い。そこで、様々な人生を歩んできた大学教員にインタビューし、それをスキットにして発表し合うことで、学生のキャリアに対する視野を拡げられるのではと期待し、このような研究課題を設けた。

活動後に行ったアンケート調査（添付資料参照）の結果、CISの効果として、（1）学生の自主性を高め協働性を促すこと、（2）学生どうし、および学生と教員の人間関係の構築に貢献すること、（3）自分を表現することへの抵抗を減らせることの3つが明らかになり、研究課題の1つ目は肯定された。しかし研究課題の2つ目については、「自分の進路について考えるきっかけになった。」という項目の平均値が、5件法（1：そう思わない、2：あまりそう思わない、3：どちらともいえない、4：ややそう思う、5：そう思う）で3.52に止まり、標準偏差の値（1.28）から回答がばらついていることもわかったため、十分な効果は得られなかったと結論づけた。この原因は、キャリアという側面からスキットを組み立てるといふ活動の趣旨説明が不十分だったために、過剰な演出をしたり、恋愛などのプライベートな話に終始したりして、教員が何を考えて生きてきたかという肝心な点を表現していないグループがいくつかあったためである。

次年度に向けての改善点は3つ挙げられた。1つ目は、練習時間の確保である。2017年度には、多くの学生から「スキットの練習で集まろうとしてもメンバーの予定が合わなくて十分に練習できなかった」という意見が上がり、スキットの練習に授業時間を充ててほしいという要望も出された。2つ目は、教員の協力体制の構築である。インタビューの約束をとるための連絡を学生がしてもすぐに返信しない教員がいたため、活動への協力をさらに促す必要があるとわかったためである。3つ目は、キャリア教

育の一環であることを受講者に十分意識させることである。改善方法として、スキットの評価規準にキャリアに関する項目を入れ、インタビューを受ける教員にプライベートな思い出よりも、キャリアという点で重要なエピソードを語ってほしいとあらかじめ授業担当者から依頼することとした。

以上の背景を踏まえ、2018年度は上記のような改善をして再度活動を実施、冒頭で述べた2つの研究課題を再検証することにした。改めて研究課題（Research Questions; RQs）を提示する。

RQ1：CISには学生の協働性や社会性を高める効果が期待できるか。

RQ2：CISを通して学生は今後のキャリア（人生）について考えることができるか。

## 2. 調査方法

### 2.1 参加学生とインタビュー教員

活動に参加したのは、2018年度前期に「フレッシュマンセミナー」を受講した白鷗大学教育学部英語教育専攻の1年生65名（男子32名、女子33名）である。2つのクラスがあり、筆者らがそれぞれのクラスを担当している。65名中6名がアンケートを提出しなかった、またはアンケートを行った日に授業を欠席したため、分析対象となったのは最終的に59名（男子26名、女子33名）になった。インタビューに協力したのは英語教育専攻に所属する教員を中心とした10名（男性6名、女性4名；日本人4名、英語話者6名）で、うち8名は前年度の活動にも協力している。専門分野は主に英語教育学と英文学だが、職歴は多様である（詳細は大木・鈴木、2018を参照）。

### 2.2 活動手順

前年度の反省点を踏まえ、大幅にスケジュールを変更した。図1は2017

年度と2018年度のスケジュールを比較したものである。なお、①～⑮の数字は何週目の授業かを表している。

大きな変更点は次の2点である。1点目は、余裕をもってスキットの準備が行えるように、活動説明と発表のあいだの期間を1か月から2か月に伸ばしたことである。インタビューを教員に依頼する際のメールの書き方の指導や、インタビューにおける質問の準備は、2017年度は③回目の授業で行ったが、2018年度はGW明けの④回目の授業で行った。したがって2017年度はGWを準備期間に含めているが、2018年度では含めていない。それでも2018年度はかなりゆとりのあるスケジュールになっていることがわかるだろう。

2点目は、前年度にメンバーの予定が合わず授業外で練習できないグループがあったため、発表が行われる前の週に授業内で練習する機会を設けたことである（1コマ90分すべて）。この練習は実際の発表会場となるホールで行われたため、ステージへの登場の仕方や立ち位置をどうするかなど、細かい打ち合わせをしていたグループも見受けられた。

	①	②	③	休み	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	
2017年度	4/14	4/21	4/28	5/5	5/12	5/19	5/26	6/2	6/9	6/16	6/23	6/30	7/7	7/14	7/21	7/28	
			活動説明・インタビュー準備	GW			スキット発表	スキット発表									
				← インタビュー&準備 →													
2018年度	4/9	4/16	4/23	4/30	5/7	5/14	5/21	5/28	6/4	6/11	6/18	6/25	7/2	7/9	7/16	7/23	
			活動説明	GW	インタビュー準備									授業内練習	スキット発表	スキット発表	
					← インタビュー&準備 →												

図1. 2017年度と2018年度の活動スケジュールの比較

スケジュールに加えて、評価規準の見直しも行った。2017年度は、①Content（スキットの内容）、②Expression（演技の出来栄え）、③Teamwork（メンバー間の連携）の3つの観点について、それぞれ5段階（1：Poor、2：Fair、3：Average、4：Good、5：Excellent）でピアと教師が評価を行った。しかし、趣旨とずれた劇を演じていたグループがいくつかあったため、2018年度は4つ目の観点として「④Entertainment（演出）」を加えることにした（各項目の評価規準や配点は下記を参照）。この項目の評価規準は「観衆を盛り上げるような演出があったかどうか」である。これは、演出上の面白さを評価する項目をあえて設けることで、「①Content」の評価規準を明確にすることを目的としている。加えて、①の配点を最も高くすることで（25点満点中8点）、この評価項目を重視していることを明確にした。このような趣旨を学生に理解してもらうために、活動説明時に評価項目とそれぞれの評価規準を記した用紙（下記参照）を配布して説明した。

#### ①Content（1～8ポイント）

キャリア選択時の教員の心情をどれくらい再現できているか。ただ楽しいだけのスキットには高評価は与えないこと。どのような考えや価値観にしたがって進路や職業を選択したか表現できている場合に高評価を与えましょう。スキットが極端に短いor長いと感じられる場合は減点の対象としてください。

#### ②Expression（1～6ポイント）

表情の作り方やジェスチャーの使い方、視線、声の抑揚や声量なども含めた、演技の上手さ。小道具や効果音を上手に使えている場合も高い評価を与えて構いません。演技者が原稿を見ながら話している場合は大きく減点してください（ナレーターは原稿を見てもOK）。

③Teamwork（1～6ポイント）

発表時にグループメンバーが連携できているかどうか。特定のメンバーに役割が偏ることなく、平等に発表に参加しているかも評価の対象としてください。明らかに練習不足で、本番中に打ち合わせをしているような場合は大きく減点してください。

④Entertainment（1～5ポイント）

観衆を盛り上げるような演出があったかどうか。盛り上げるために教員から聞いた話を多少大げさに表現するのは構いませんが、明らかに事実でないことをスキットにするのはやめましょう。そうならないためにも、インタビューではできるだけ詳しく話を聞きましょう。

### 2.3 活動後アンケート

活動後に配布したアンケートは大木・鈴木（2018）で使用したものと同じである（添付資料参照）。3つの大問から成り、大問1は選択式で合計19項目を尋ねた。A～Dの4つのセクションがあり、Aでは「発表の準備」に関する5項目を、Bでは「自分たちの発表」に関する4項目を、Cでは「他のグループの発表」に関する3項目を、Dでは「活動の効果」に関する7項目を尋ね、それぞれ5件法（1：そう思わない、2：あまりそう思わない、3：どちらともいえない、4：ややそう思う、5：そう思う）で回答してもらった。大問2と3は自由筆記式で、前者では活動の改善点について、後者では活動全体に対する感想について任意で回答してもらった。

### 2.4 分析方法

大問1については、項目ごとに記述統計を算出したのち、年度間に平均値の差があるかどうかを独立したサンプルの $t$ 検定で調べた。大問2と3の自由筆記式項目への回答は、データの解釈に適宜参照した。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 発表の準備について

「A. 発表の準備について」に関する5項目とも、2017年度と同じような結果が得られた（表1参照）。

表1. 「A. 発表の準備」に関する項目の記述統計と  $t$  検定の結果（ $N = 59$ ）

項目	2017年度	2018年度	$p$
(1) 活動の目的や手順について十分理解できた。	4.42 [0.80]	4.49 [0.70]	.587
(2) グループの人と協力して準備を進めることができた。	4.39 [1.06]	4.07 [1.10]	.098
(3) インタビューの質問に関するアイデアを積極的に出せた。	4.06 [1.00]	4.07 [0.93]	.963
(4) スキットの台本や演出に関するアイデアを積極的に出せた。	4.15 [1.02]	4.03 [1.03]	.530
(5) 本番に備え、十分にスキットの練習ができた。	3.81 [1.23]	3.56 [1.19]	.258

注. [ ] 内の数値は標準偏差

まず、5項目中最も平均値が高かったのは2017年度と同様に（1）で、多くの学生がCISの目的や手順を理解していたことがうかがえる。しかし、キャリア教育の一環であることをちゃんと理解していたかどうかはこの結果だけではわからない。3.4で詳述するが、前年度に比べるとこの趣旨は理解してもらえていたようである。

加えて、（2）～（4）の平均値がすべて4.00を超えていたことから、多くの学生が準備時に協力していたことがうかがえる。このような結果が得られたのは、スキットを1人で演じることはできず、メンバーとの協働が不可欠だからだろう。大問3の感想では次のような肯定的な意見が多数見られた。

「同じグループの人とさらに仲良くなることができました。準備の時間

もどのようにしたらインタビューの内容をわかりやすく伝えられるか、グループ内で色々と考える時間が楽しかったです。]

「最初は色々なことが心配だったが、追い込まれる毎に仲間と共に乗り越えてきた。最後はメンバーとも仲良くなれたし劇もやりたい事をやれたので良かった。」

「同じグループにならなかったらきっと4年間話す機会がなかったかもしれないチームメイトと仲が深まったと思った！発表するのが楽しくで、これはチームメイトのおかげだと思った。」

「私のグループは、3人という少ない人数でやりましたが、1人1人が協力して演じることができた。他の班の発表を聞いて、他の先生のキャリアを知ることができて、「この先生の授業をとってみたい」と思うこともできた。スキットをやることができて良かった。」

これらの感想から、多くの学生にとってCISはメンバーとの関係を深められる良い機会となっていることがうかがえる。

しかし、この結果を喜ぶことには少し慎重になる必要がある。(2)の平均値が2017年度に比べて0.32低く、この差が有意傾向 ( $p < .10$ ) を示したためである。また標準偏差が1.10とやや高い値を示したことから、協力して準備できた学生とできなかった学生が混在している可能性が高い。協力して準備を進められなかった理由は2つあると思われる。

1つ目は、グループのメンバーの日程調整がうまくいかなかったことである。実際に、改善点を尋ねた大問2への回答では「グループのメンバーと時間が合わず練習がなかなかできなかった。」や「どうしても空きコマがかぶらなかつたりして練習ができる時間が自分達ではとれないので、授業の際に練習時間をもっと作ってほしいと思いました。」などの意見があっ



た。準備が十分にできなかったということは、（5）の平均値が3.56であったことにも表れている。このような課題は2017年度にも挙がっており、そのため2018年度は活動期間を大幅に延長し、授業時間を使って練習する機会も設けたが、それでも十分ではなかったようである。

この点については更なる改善が必要だと考えられるが、「フレッシュマンセミナー」では他にやるべきアクティビティもあり、また、可能な限り授業内に時間を取ったとしても、学生が「十分」と感じる時間数を取るとは困難と思われる。最初のイントロダクションにおいて、グループで準備できる時間が少なく、また、課外に時間を合わせることも難しい、という予測を伝えておき、限られた時間の中で効果的に準備をすることに意識を向けさせることも重要かもしれない。

2つ目は、メンバーの意識や意欲に差があり、特定の学生に負担が偏ってしまったことである。実際に大問2や3への回答に次のような指摘があった。

「準備がほぼ全て私のみだったので中々辛いものがありましたが無事に終わってよかったです。」

「やる気の有無が目立った。特に仲良い人で固まったグループとそれ以外の差が凄まじかったので、グループをくじなどで完全無作為の方がいいと思う。見ててつらい、気まずいグループがあった。」

「1人の人がメールも送って、原稿も書いて、負担が多くて大変だったので、役割を決めてみんなで協力した方が良いと思う。」

「班によっては1人だけでスキットの内容を考えるという形になってしまっているところもあるので班の皆さんで考えるという意識作りが大切だと思います。」

学生の意識の差を埋め、負担が偏らないようにするためには、全員で取り組むのだという意識作りを徹底する必要がある。その方法は2つあると考えられる。1つ目は、役割分担シートを作成して、それをもとに準備計画を立てさせることである。そうすれば各自が責任を持って行うべきことが明確となり、負担が偏ることを予防できる。2つ目は、準備に関して自己評価やグループメンバーのあいだで相互評価させることである。スキットの評価項目に「Teamwork」があるが、これは発表時に協力できているかをねらいとしていた。これとは別に準備への貢献度を評価する仕組みや項目を取り入れる必要があると思われる。

### 3.2 自分たちの発表について

「B. 自分たちの発表」に関する4項目も、2017年度と同様の結果が得られた（表2参照）。

表2. 「B. 自分たちの発表」に関する項目の記述統計と  $t$  検定の結果 ( $N = 59$ )

項目	2017年度	2018年度	$p$
(6) 発表を楽しむことができた。	4.39 [0.90]	4.27 [0.91]	.471
(7) 緊張した。	4.04 [1.24]	3.97 [1.35]	.734
(8) 練習したことが本番でもできた。	3.78 [1.22]	3.95 [0.88]	.358
(9) 台本に頼らずに発表できた。	3.38 [1.48]	2.98 [1.15]	.144

注. [ ] 内の数値は標準偏差

まず、(6)が4.00を超えたことから、多くの学生がスキットを演じることを楽しんでいただけたことがわかる。感想の中には「クラスメイトとの仲が深まった気がします。スキットの準備は大変でしたがとても楽しかったです。」や「始めはどう表現したら良いのかわからずとまどっていたが、グループの人達がアイデアを多く出してくれて練習も来てくれたおかげで成功することができてよかった。」のように、困難を乗り越えることで充実感が得られたことを示唆するものがいくつか見られた。

その一方、「しんどかったです。」「苦痛でしかなかった。」のように否定

的な感想を述べている学生もおり、学生によって向き不向きがある活動であることも示唆された。これらの学生は「劇はやる必要ないと思う。」「インタビューは良いと思うけど、劇は負担が大きいです。」ということも感想として述べており、劇を重荷に感じていたようである。また、「フレッシュマンセミナー」は教育学部の必修授業であるため、シラバスを確認したり、途中で登録取り消しをしたりすることができないという点で、負担感がある場合はその苦痛がさらに増加することも考えられる。このような負担を減らすためには、いしい（2017）の著書『高校生が生きやすくなるための演劇教育』で紹介されているような段階を踏んだ指導が必要である。しかし、授業時間には限りがあるため、スキットを重荷に感じる学生にはそれ以外の表現形式（例：スライド発表、紙芝居、動画作成）も選択肢として与える必要があるかもしれない。

（7）の平均値が3.97と4.00に迫っていたことから、多くの学生が緊張していたことがわかる。しかし標準偏差も1.35と高かったため、その度合いは学生によって差があったようである。感想の中には「人前で発表することによって、緊張する耐性が上がったと思う。」や「今までの人生では考えられないほど緊張せずに発表できた。初めて人前にでることが楽しいと思えた。」のように、人前で発表することで成長したことを示すものもあった。これは後述の（16）でも同様の結果が得られている。

最も平均値が低かったのは（9）で、3.00をわずかに下回った。原因は準備が不足していたからだと思われる。準備に関する（5）との相関関係を調べたところ、 $r = .58, p = .000$ で有意だったことから、台本に頼らずに発表できるかどうかは練習量と関連があることが示唆された。練習の機会をさらに増やすための工夫が必要である。

### 3.3 他のグループの発表について

2017年度と同様に、3項目とも高い平均値を示した（表3参照）。（10）と（11）の平均値は19項目全体で見ても最も高く、加えてこれらの標準

偏差がともに小さかったことから、大半の学生が他のグループの発表を楽しんでいたことがわかる。実際に、この2項目に対して1(そう思わない)または2(あまりそう思わない)と答えた学生は1人もいなかった。(12)は有意に下がったが、それでも4.34と高い平均値を示した。大問3への回答を眺めると、「他の班の劇を見るのが楽しかった。」「おもしろいグループがほとんどでたのしかった。」「劇の流れや設定、全て自分達で自由にできたので、さまざまな発表の仕方を見ることができてとてもおもしろかったです。」など肯定的な感想が多数見られた。各グループが良い発表をしようと創意工夫したおかげである。

表3. 「C. 他のグループの発表」に関する項目の記述統計と *t* 検定の結果 (*N* = 59)

項目	2017年度	2018年度	<i>p</i>
(10) 発表を楽しんで観ることができた。	4.75 [0.50]	4.68 [0.60]	.488
(11) 面白いと感じたら笑うなど、自分なりに素直に反応できた。	4.81 [0.47]	4.69 [0.53]	.220
(12) 拍手をするなどして、発表しやすい雰囲気づくりに努めた。	4.76 [0.50]	4.34 [0.84]	.001

注. [ ] 内の数値は標準偏差

### 3.4 活動の効果について

2017年度に比べて、大きく変化した項目はなかった(表4参照)。全体的に平均値は高く、様々な効果があったことがわかる。

表4. 「D. 活動の効果」に関する項目の記述統計と *t* 検定の結果 (*N* = 59)

項目	2017年度	2018年度	<i>p</i>
(13) 自分の進路について考えるきっかけになった。	3.52 [1.28]	3.83 [1.09]	.151
(14) グループメンバーとの仲が深まった。	4.58 [0.74]	4.39 [0.77]	.155
(15) クラスメイトのキャラクターが以前より理解できた。	4.58 [0.72]	4.47 [0.73]	.407
(16) 人前で自分を表現することへの抵抗が減った。	3.91 [1.06]	3.95 [1.01]	.834
(17) 英語教育専攻の先生方を前より身近に感じる事ができた。	4.43 [0.78]	4.24 [0.99]	.218
(18) 丁寧なメールの書き方がわかった。	4.04 [1.07]	4.00 [1.00]	.809
(19) インタビューを依頼する手順や質問の仕方がわかった。	4.30 [0.95]	4.47 [0.68]	.241

注. [ ] 内の数値は標準偏差

まず、統計上有意な違いはなかったものの、キャリア教育の効果に関する(13)は平均値が0.31上昇した。学生の感想にも「インタビューを通して様々なことを知ることができ良い機会でした。」「先生のキャリアをインタビューして、驚くことが多くて、とても勉強になりました。色々な先生方のキャリアを聞いて、自分の将来について考えるきっかけとなった。」「先生ごとにそれぞれ違うキャリアを歩んでこられたということが分かってとても充実した時間になりました。」「先生方のキャリアが知れて、進路について考えることができました。」などの意見が見られ、昨年度よりも自分のキャリアに関心が向いた学生が多かったように感じられる。これは、キャリアに関する内容を評価の基準に盛り込んだことで、インタビュー時の質問やスキットの構成が変化して良い影響をもたらしたからだと考えられる。

クラスメイトとの人間関係に関する(14)や(15)も高い平均値を示したことから、CISが人間関係の構築に寄与することが示唆された。感想の中にも「同じグループの人とさらに仲良くなることができました。」「あまりよく知らない人と知り合えてよかったです。」「色々な先生や演じる人たちのキャラを見ることができて楽しかったです。」「別のクラスの人の顔

や性格も知ることができたので良かったです。」など、多数の肯定的な回答が見られた。しかし先述したように、うまく協力できなかった、あるいはこうした共同作業自体が苦痛だと感じていた学生もいたことからさらに改善する余地はあると言える。

(16) も3.95という比較的高い値で、3.2でも紹介したように、人前で発表するという経験を積んだことで緊張に慣れたという学生がいたことがわかった。

(18) および (19) についても、ともに4.00を超えたことから、メールの書き方やインタビューの仕方について一定の教育効果があったことが示唆された。裏付けとして、「本当にこのインタビュースキットが必要かどうかについて疑問を持ちます。」と述べている一方で、同じ学生が「自身の表現力や丁寧なメールを書くといったスキルを磨くには役に立ちました」と、メールライティングの点に関しては好意的な感想があったことが挙げられる。3.2でも述べたように、スキットを負担に感じる学生が一定数いることがわかったため、スキット以外の表現形式も検討する必要があるが、その場合でも、初年次教育の一環としてこの項目は教授する必要があると思われる。

## 4. 結論

### 4.1 RQsについて

RQ1 (CISには学生の協働性や社会性を高める効果が期待できるか) については、前年度と同様に、肯定的な結果が得られたと言える。しかし、準備時間の不足や意欲の格差が原因で、十分に協力できなかったと感じていた参加者もいたため、スケジュールを調整したり、準備における貢献度について自己評価させたりするなどの改善が必要であることがわかった。

RQ2 (CISを通して学生は今後のキャリア (人生) について考えることができるか) については、平均値が前年度の3.52から3.83に上昇したことが

ら、評価規準を見直した効果があったことが明らかとなった。さらにキャリアへの意識を高めるためには、観劇後に自分の今後のキャリアにどのように役に立つと思われるかなど、感想を書かせると良いかもしれない。

#### 4.2 今後の課題

2年間の指導を通じて最も課題だと感じたのは、①メンバーが協力しやすいグループをどのように作成するかということと、②スキットに大きな抵抗を感じている学生をどのように支援するかということの2点である。

①で難しいのは、この活動を通じて新しい人間関係を築いてほしいという思惑との両立である。Aクラスでは、まず日本人と英語話者のどちらにインタビューしたいか学生に尋ねて2つに分け、次に男女が均等に分かれるように4人のグループを無作為に組んだ。その結果、日本人教員を希望した男子学生が2名しかいなかったために性別の偏りが生まれ、3つのグループで男子または女子が1人しかいないという状況が生まれてしまった。これらのグループの中には話し合いがうまくいかなかったところもあったようだが、異なる性別の学生と意志疎通を図る機会も彼らには必要である。Bクラスでは男子学生、女子学生でそれぞれペアを作ったあとにくじ引きをしてペアどうしを組み合わせ、4人1グループを形成させた。だが、すぐに打ち解けられるタイプと、友人を作るまでに時間がかかるタイプがあり、また、学生どうしの相性もある中で、長期のプロジェクトのグループをどの学生にも納得のいく形でつくるのは難しい。また、期間限定のグループであるため、短期で完成できるようにしようとすると、準備時間が短くなるというジレンマがある。

②については、スキット以外の表現形式を選択肢に加えることが解決策になるが、形式によっては人前で自己表現することに慣れるという当初の目的を達成できなくなってしまう。

どちらについても、何を優先するのか担当者間で協議して、指導方針を決める必要があるということが明らかになった。

## 引用文献

- いしのみちこ. (2017). 『高校生が生きやすくなるための演劇教育』 東京：立東舎.
- 大木俊英・鈴木宏枝. (2018). 「フレッシュマンセミナーにおけるドラマ教育の導入  
—Career Interview Skitの効果に関する探索的調査—」『白鷗大学教育学部論集』  
12, 159-176.
- おおたとしまさ. (2017). 『名門校の「人生を学ぶ」授業』 東京：SBクリエイティブ.



添付資料

Career Interview Skit 自己評価シート

1 (1)～(19)の各項目について、下記の基準にもとづき、最も自分の気持ちに近いと思う数字に○をつけてください。なお準備や発表に参加していない場合は、AとBの項目については評価を行わないこと。

【1：そう思わない 2：あまりそう思わない 3：どちらともいえない 4：ややそう思う  
5：そう思う】

A. 発表の準備について

- |                                 |   |   |   |   |   |
|---------------------------------|---|---|---|---|---|
| (1) 活動の目的や手順について十分理解できた。        | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (2) グループの人と協力して準備を進めることができた。    | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (3) インタビューの質問に関するアイデアを積極的に出せた。  | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (4) スキットの台本や演出に関するアイデアを積極的に出せた。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (5) 本番に備え、十分にスキットの練習ができた。       | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

B. 自分たちの発表について

- |                     |   |   |   |   |   |
|---------------------|---|---|---|---|---|
| (6) 発表を楽しむことができた。   | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (7) 緊張した。           | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (8) 練習したことが本番でもできた。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (9) 台本に頼らずに発表できた。   | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

C. 他のグループの発表について

- |                                  |   |   |   |   |   |
|----------------------------------|---|---|---|---|---|
| (10) 発表を楽しんで観ることができた。            | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (11) 面白いと感じたら笑うなど、自分なりに素直に反応できた。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (12) 拍手をするなどして、発表しやすい雰囲気づくりに努めた。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

D. 活動の効果について

- |                                 |   |   |   |   |   |
|---------------------------------|---|---|---|---|---|
| (13) 自分の進路について考えるきっかけになった。      | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (14) グループメンバーとの仲が深まった。          | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (15) クラスメイトのキャラクターが以前より理解できた。   | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (16) 人前で自分を表現することへの抵抗が減った。      | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (17) 英語教育専攻の先生方を前より身近に感じる事ができた。 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (18) 丁寧なメールの書き方がわかった。           | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (19) インタビューを依頼する手順や質問の仕方がわかった。  | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

2 この活動を来年度も実施する場合、何を改善すべきだと思いますか。提案があれば書いてください。

3 この活動の感想を自由に書いてください。

